
七夕恋祭り

柑薙 玲奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕恋祭り

【Nコード】

N3868BA

【作者名】

柑薙 玲奈

【あらすじ】

イケメンの幼馴染と普通の女の子の超短編恋愛小説。
後半いちゃつき過ぎちゃててごめんなさい…。(苦)
でも、内容は結構面白いはずだから！

*この小説はほかのサイトへも投稿する場合があります。

ただし詳しいサイト名などは未定

*

荷造りしていると、懐かしい写真が出てきて手が止まる。高二の時二人で月峰神社の七夕祭りに行った時の写真。その写真を見ながら私は当時のことを思い出す。

* * * * *

私の名前は三嶋夏葵^{ミツマナツキ}。どこにでもいる高校二年の女の子。平凡だけどけっこう楽しい毎日を送ってます。でも…やっぱり高二にもなるとそれだけじゃ物足りない…かな。

「はあ……彼氏ほしいなあ…」

私の周りはカップルが沢山いる…と言うか私の女友達には全員彼氏がいるんだ…。つまり、私だけ置いてけぼり。それに、今日は月峰神社の七夕祭りの日。今年もみんなは彼氏と二人つきりで行くだろうし、彼も忙しいだろうからいつしよにお祭りには行けないし…。もちろん私だって笹岡神社の恋札を買ったりとか努力はしているんだけど…。

「…今年も一人でお祭りか…」

「おい、夏葵。なあに暗い顔してんだよ。」

と考えていたら彼に声をかけられた。振り返ると人懐っこい笑顔。

「べつに暗い顔なんかしてないよ！…それより、そっちこそ部活はいいの？来週試合でしょ。」

彼の名前は安西翔^{アンザイカケル}。私の幼馴染でバスケット部のエース。だから、去年の私の誘いは部活を理由に断られたんだ。いくら翔と私が幼馴染でも学園のアイドルと普通の女の子じゃ釣り合わないよね…。

「部長権限で休みにした。…それに、今日は一年の中で数少ない恋人たちの日だからな…」

「えっ、休みにしちゃっていいの？次は大切な試合なんじゃ。」

「いいだろ別に…！それより、今日空いてたら月峰神社の朱雀門前に5時半な。」

「え、ちよつと勝手に決めないでよ！…まあ、予定はないけど…」
「じゃあ、来いよ。」

そう言つて翔は走つて帰つていった。強引だけど、結局私は翔の言いなりなのよね…。

* * * * *

早く準備ができたので約束の時間の20分前に来ちやつた。さすがに早く来すぎたかな。もともと翔は時間に正確じゃないし。待ち合わせの時間に理由なしで10分は平気で遅れて来るくらいに。まあ、さすがに試合の集合時間には遅れないみたいだけど…。

「なつっ…。よっ、よお…似合ってるな…浴衣。」

「えっ、まだ15分前だよ！翔が早く来るなんて…雨天中止にならないといいけど…」

「なっ、なんだよ、俺が早く来ちやわるいかよ！遅刻すると毎回ブーブー文句言うくせに。」

そう言つて翔は私の頬をつまんでくる。それが、恥ずかしくて私はそっぽを向いた。

「いった〜！…毎回遅刻してくるから驚いただけじゃない！」

「べっ、別に、お前の浴衣姿が楽しみすぎて早く来た訳じゃないからな！」

乱暴に後ろ髪を掻きむしつて照れる翔がかわいくて私は思わず笑つてしまう。

「わっ、笑うなよ！…こうなったら俺もそれなりに応戦する！」

そう言つと翔は私と手を繋いできた。しかも恋人繋ぎで。

「そのまま、二人で朱雀鈴を鳴らすまで喋るなよ。」

そう言つて翔は黙つて歩き出した。私たちのカラコロっていう下駄の音だけが響いてる。隣を見上げたらすぐ近くに翔の顔があった。でも…その表情はいつもと違ってどこか不安げで、私はそんな翔のことが心配になったけど、その顔があまりにも綺麗だったから思わず見とれてしまった。そうやってよそ見してたら転びそうになって、それに気づいた翔が慌てて私を抱き留めて唇を塞ごうとしたけど間

に合わなくて…私は声を上げてしまった。

「きゃっ！んぐくっ…。」

遅かったことに気付いた翔はすぐに私の唇を塞ぐのをやめたけど、すぐく寂しそうな顔になるからいたたまれなくて。でも…私にはどうすることもできなくて…。

「…ごめん…翔。」

「…いいんだ。俺が間違ってたから…。何も言っていないのに永遠とかないよな。」

「…なに、言ってるの？」

「…あ、やつその…。…俺、お前…夏葵のことが好きなんだ。」

「えっ何！？…あっ、これは夢か…って…えっく！？私いつの間に寝てたの！？」

「…おまえって…ほんと天然だな…。けど、2度は言わねえから夢にするなよ。」

「でも、私は翔が好きになってくれるような女の子じゃないよ！！」

「見た目だけならな。…俺、気付いたんだ。夏葵が当たり前のように俺にしてくれたことが実は当たり前なことじゃなくて、そんで、そうしてくれてる夏葵がすごいってこと」

「私はなにも…」

「してくれてる！俺が遅れるって分かっても時間には来てくれたり、わがまま聞いてくれたり、酷いこと言っても俺のそばに居てくれたり、他にも沢山ある。」

「それは…翔が好きだから！」

言った瞬間に翔が私の頬にキスしてきた。

「お前が俺の物だって印。…俺にも印付けとかないと誰かに取られるぞ。」

「…もっ、ほんと強引なんだから。」

* * * * *

あのあとしばらく二人でふざけて笑い合ってた。それから二人で金魚すくいとかして、はたから見ればなんでもない幼馴染同士のじゃれ

あいかもしれないけど、私たちにとっては…大切な大切なファーストデートだった。だから、お祭りが終わっても離れたくなくて…小さいころよく一緒に遊んでた公園で遊んで、家に帰ったのは9時を過ぎ。それで、二人して私のお母さんに怒られたんだよね。…懐かしいな。

ふと、カレンダーを見ると7月7日に翔がつけた黒丸があった。私たちの結婚式がその日にある。不安がないと言ったら嘘になるけど、私は翔と一緒に暮らせるようになることがうれしい。そうだ、早く荷造り終わらせないと。大好きな翔が私を待っているんだから。

(後書き)

初めまして。私の小説を読んでくれてありがとう。私が書いた小説七夕恋祭りはどうだった？楽しんでもらえたならいいんだけど…。私はまだまだ駆け出しの小説家だけど、これからいろいろと書いていく予定だから期待していてね。それじゃ、また会える日を楽しみにしています。たくさんの方が読んでくれるとうれしいな。

読者の皆さんに愛をこめて

新米小説家 柑薙 玲奈

より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3868ba/>

七夕恋祭り

2012年1月10日00時48分発行